

ラセン状の声・仮装複合の声・時代の声

マライア・キャリー（70年、アメリカ生まれ）

一本の茎ないし枝のように差し出される声が既成の歌の基本であると仮定すると、かの女の声は一本の茎ないし枝をうねり這い昇ってくる蔓のような迫力があり、超高度の音程を自在に往還できる才能によって一層その効果が増幅されている。歌詞からはみ出す呼吸音や付加音（オオとかアアなど）も歌詞に対応する声と対等の比重がある。かの女は勿論商業ペースで売りに出され、それ故に私のような者の耳にも届いているのであるが、その上でいうと、かの女の声の特性は、歌手として認められるまでの前史に影を落としているであろう混血Ⅱ仮装複合への差別（父はベネズエラ系、母はアイルランド系）をはね返しつつ、歌に潜在する可能性を取り出す喜びを共有させる力のために、意外な示唆を与えてくれる。例えば、既成の概念をラセン状にたどり再構成する試みへのインパクトとして。かの女の場合には、定式化した歌い方を超えることの素晴らしさを示した《クリスマス》シリーズの諸曲（94年）に声の特性が、自分で作詩く作曲した《デイ・ドリーム》シリーズ（95年）の特に《ヘイツ・フリー》に歌手としての、また歌という形式の自由な本質が最もよく示されている。ただ、不可避的な経過であろうが、この感覚の根源を聴こうとせず、自己の安定した（？）生活の刺激剤として扱う人々が増加しているので、そういう人たちは無視して着実な生活を選んでほしいが、それをかの女に望むよりは、私たち自身の聴き方を変革しつつ《マライア》を聴くべきなのであろう。

エンヤ・ニ・ブレナン（62年、アイルランド生まれ）

ケルトの音的文明的遺伝子を復活させている、かの女の歌は、ケルトの民を駆逐して支配的となったローマ・ゲルマン的ヨーロッパを軸として発展してきた現在の文明に疑問をもつ人々にとって、情動的な意味を持っているが、それに対応して重要なことは、かの女が今もアイルランドの暗鬱な海岸近くに住み続け、作曲・演奏・歌の全過程に仮装的に関わっていることである。何重もの孤独からつくり出した、自分の声や楽器演奏をテープにとる作業を繰り返しつつ、ラセン状に重ね合わせ、複合していく方法……。これは、六甲空間で表現と刊行を持続してきている私にとって示唆的という以上の励ましである。曲として何がいいと思うか、と十代の人々から質問された時、私は、英語の歌詞のついたものよりは、《ケルツ》シリーズ（92年）や《ウォーター・マーク》シリーズ（88年）のケルト語の歌、ハミングだけの曲、楽器だけの曲が最もいいとのべ、エンヤを聴く人がどの曲に魅きつけられるかで、その人の現在の位置が照らし出される、と付け加えた。来日をファンの代弁者のフリをして強要する日本のコマーシャルリズムへの批判も。本当のファンや本当にかの女の表現を生かし応用しようとしている人々は、かの女の表現の根拠と無縁な来日など必要としていない。かの女には世界的な人気とは無関係に（しかし、アイルランドの内戦を凝視しつつ）、断崖の傍で何かを小声で歌っているのがふさわしい。

# I AM FREE

Lyrics: Mariah Carey

Music: Mariah Carey, Walter Afanasieff

ONCE I WAS A PRISONER  
LOST INSIDE MYSELF  
WITH THE WORLD SURROUNDING ME  
WANDERING THROUGH THE MISERY  
BUT NOW I AM FREE...

YOU GAVE ME A BREATH OF LIFE  
UNCLOUDED MY EYES  
WITH SWEET SERENITY  
LIGHTING A RAY OF HOPE FOR ME..  
AND NOW I AM FREE...

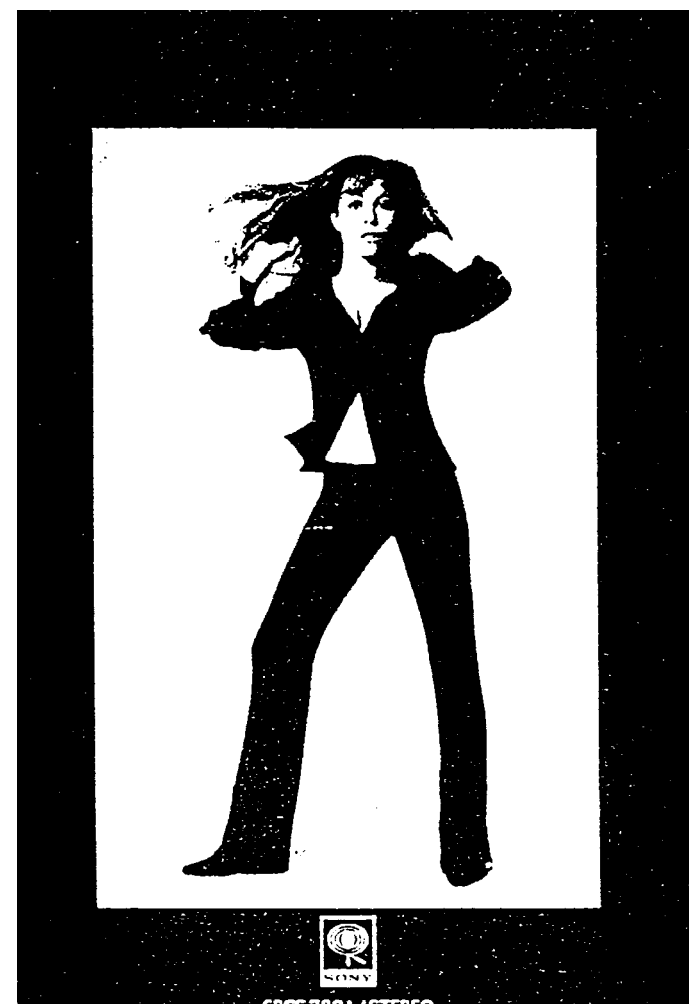
FREE TO LIVE  
FREE TO LAUGH  
FREE TO SOAR  
FREE TO SHINE  
FREE TO GIVE  
FREE TO LOVE  
FREE ENOUGH TO FLY

ONCE I WAS ALL SO ALONE  
UNSTEADY AND COLD  
BUT YOUR LOVE RAINED DOWN UPON ME  
WASHING AWAY UNCERTAINTY

BUT NOW  
I AM FREE

*Walter Afanasieff: Keyboards, Synth, Bass, Drum &  
Rhythm Programming*

*Loris Holland: Hammond B-3 Organ*



中島みゆき(52年、帯広生まれ)

アメリカ、ヨーロッパとは遠いアジアから前記の二人を把握すると、それぞれの、またみゆき自身の位置がより明確に視えてくる、いや、聴こえてくる。註のように記すと、

・作詩、作曲、ギター演奏、歌唱の全過程に関わる出発をしているために、広く知られていく段階で音楽の商業システムや楽器、技術、複数の声を媒介する他者との共同作業がもたらす仮装複合感覚を深く身に引き受け、かつ逆用もしてきている。従って、前記の二人の音楽の理解や、それ以外の多くの試みにとって役立つ。

・ある歌が国境を超えて、原曲の言語がただちには理解できない範囲へ広がる場合の問題としていうと、みゆきは、明確に日本の国境を超える民衆の歌をめざしており、それは「EAST ASIA」(92年)で、ひそやかな反権力性の姿勢でラセン状に繰り返される「く」の名は EAST ASIA 黒い瞳のく

むずかしくは知らない。ただ「EAST ASIA」という歌詞や、アジアのモンスーン地帯の音感を想起させるメロディーからも示されている。実際に東アジアでのコンサートもおこなわれてきているが、かの女の歌は、かりに日本の国内で聴く場合にも東アジアの歌として聴き直す段階に来ているのではないか。

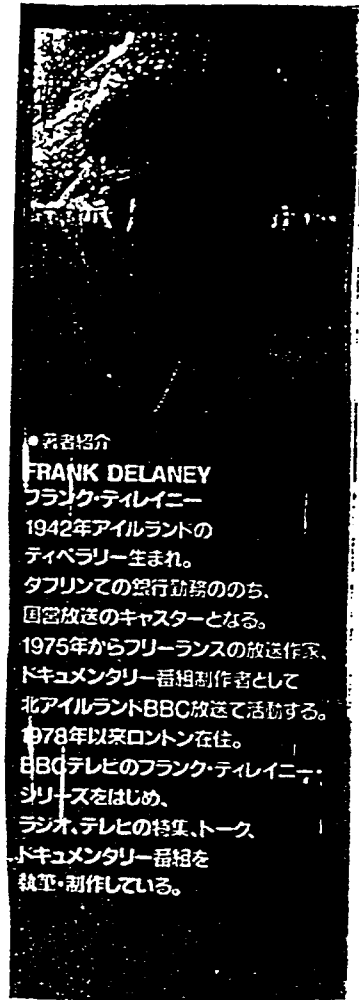
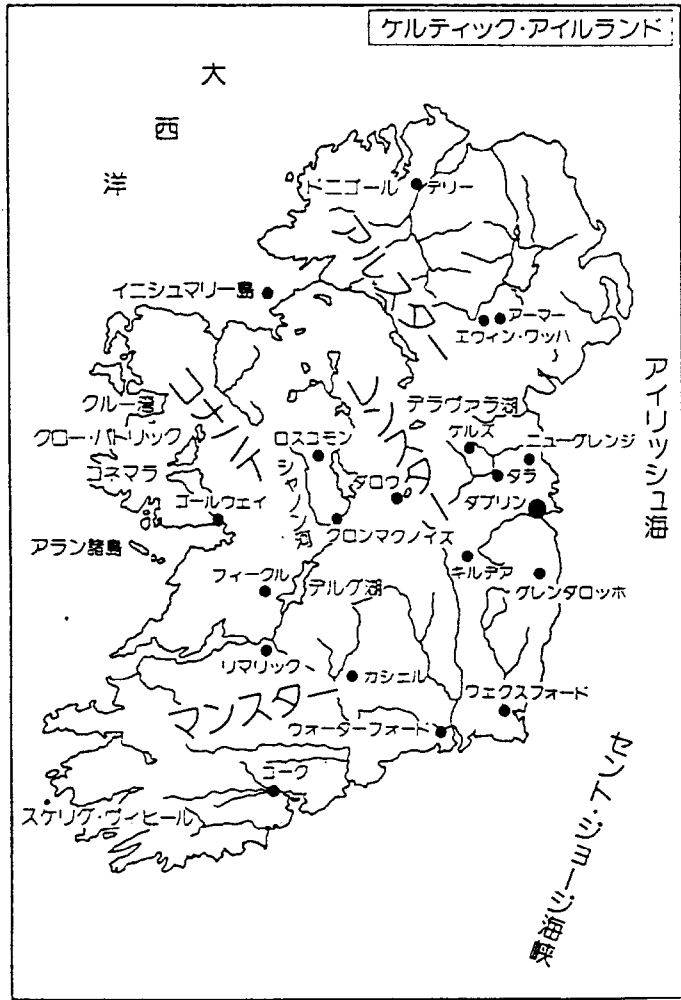
・マライアは全ての歌を英語で、かつ驚くべき質と幅の声で歌うから殆ど目立たないが、対比的にエンヤの本質的なものがケルト語ないし楽器で表現されていることに注目するならば、東アジアの人々がみゆきの歌の意味を日本語としては殆ど理解しないまま聴く場合の感覚へ接近しやすくなる。それは私たちのように日本語を理解する者にとって把握が困難であったみゆきの本質を示唆してくれるかも知れない。これは、マライアやエンヤが歌う言葉を理解できる人々にもいっておきたいことである。

・ただ、ここまでのべたことを提起を実現していくのは容易ではないと直観する。東アジアでのコンサートの曲名を正確には把握していないが、例えば、69年後の暗い時期に出現した「時代」(75年)等は含まれていないであろうし、それらのCDやテープも殆ど売れていないはずである。これらの曲が東アジアで心をこめて聴かれるようになるまでには、東アジアの社会的、文明的段階が日本の69年に対応する瞬間を潜り、その後の困難さを味わうことを必要条件とするから。

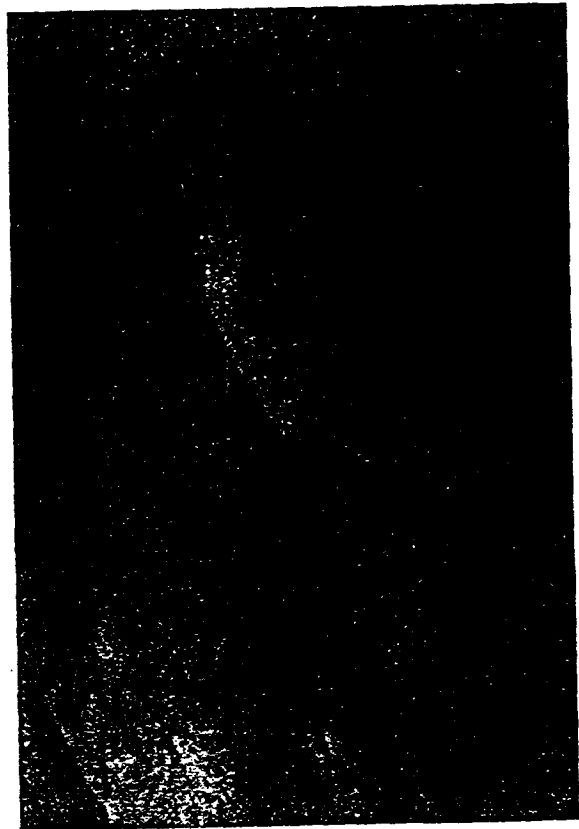
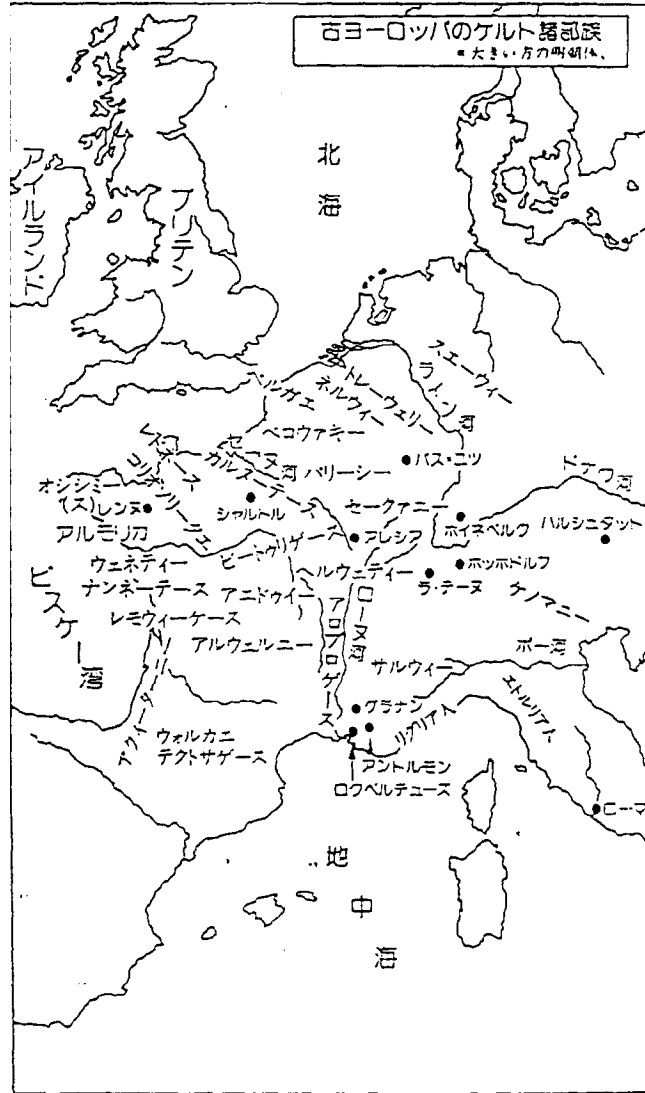
・この直観は、東アジアが発展途上の遅れにあるのではなく、逆に日本こそが、69年を通過した後、東アジアのどの地域よりも69年から後退しているという判断に基づいている。むしろ、このような聴き方を再びラセン状に実現する位置にあるのは、私たち自身なのである。この遅れの転倒を私たちは音楽だけでなく様々の領域で持続して、(日本の国境内を含む)東アジアの人々と一緒に、みゆきやマライアやエンヤの歌の向こうにあるものを聴き取り、まだ出現していない「時代」の歌をつくり出し、歌い始

たい。

、



● 著者紹介  
**FRANK DELANEY**  
 フランク・デレイン  
 1942年アイルランドの  
 ティペラリー生まれ。  
 ダブリンでの銀行勤務ののち、  
 国営放送のキャスターとなる。  
 1975年からフリーランスの放送作家、  
 ドキュメンタリー番組制作者として  
 北アイルランドBBC放送で活動する。  
 1978年以来ロンドン在住。  
 BBC(テレビのフランク・デレイン)・  
 シリーズをはじめ、  
 ラジオ、テレビの特集、トーク、  
 ドキュメンタリー番組を  
 執筆・制作している。



エンヤ・ニ・ブレナン

ケルト—生きている音楽 ● 発行所

1993年3月1日 第1版第1刷発行  
 1994年2月1日 第1版第4刷発行

監修者 鶴岡真司  
 訳者 森野聡子  
 発行者 矢部文治  
 印刷所 岩田印刷株式会社

発行所 創元社

(〒530) 大阪市北区西天満1-4-2  
 TEL:06-363-3331

註

1―この項目で言及した歌（「IT'S FREE」・「THE MEMORY OF TREES」および

「EAST ASIA」）の三曲をテープ録音したものを準備しているので、聴いてみたい

方はご連絡下さい。テープ録音はもちろんへ無断ですが、その意味は機会をつくりつつかの女たちへ伝えていきます。きっと同意するでしょう。

2―この項目は、もともとオウム教団の音楽について、高次の境地への移行に役立つアストラル音楽のテープが約20種類あることを知ったので、女性の声による歌のテープがあれば、それを媒介して何かを論じるつもりで構想していた。しかし、テープを申し込む際に確認すると、麻原尊師が瞑想中に啓示を受けて作曲したものと、器楽演奏によるものだけで、女性の声による歌のテープはない、とのことであった。ここにはオウム教団における女性の位置づけ（従属化、手段化）が反映しているといってもよいであろう。しかし、ともかくテープの一つ「アストラルへの旅」を聴いてみた。これは麻原氏が啓示・作曲したものをカッサバ氏と音楽集団が編曲・器楽演奏したと記されている。私はまだ現実の渦に執着しているためか、特に魂が浄化されるというような感じにはならなかったけれども、参考にはなったし、オウムへのめり込む修行のためという範囲を超えて多くの人に示唆を与えうらと思う。

私にとっては、このような経過をたどって前記の三人について、より深く何かが判ってきたことが最も大きい成果であるといえる。これからも、

歌うことの喜びと器官への影響（マライア）

楽器との対的関係の自覚（エンヤ）

古代アジア以来の巫女性の現代化（みゆき）

などを媒介して、音と宗教（だけでなく、幻想性構造の総体）の原初と終焉をとらえていきたい。

3―橋本治『宗教なんかこわくない！』（95年7月）で一番感心したのは、テレビで流された麻原氏の「信者のためのテープ」の声へ修行するぞ……修行するぞ……修行するぞ……の語尾が勢いよく上がらず、逆に下がっていることへの注目である。橋本氏は、この話し方は、他人から一度もまともに扱われたことのない人間の話し方であると結論づけている。この結論には直ちに同意し難いけれども、着眼点には感心した。他の論点のどれよりも。

## EAST ASIA

作詞・作曲：中島みゆき/編曲：美月一三

降りしきる雨は霞み 地平は空まで  
旅人一人歩いてゆく 星をたずねて  
どこにでも住む場のように 地を這いながら  
誰とでもきっと 合わせて生きてゆくことができる  
でも心は誰のもの 心はあの人のもの  
大きな力にいつも従わされても  
私の心は笑っている

こんな力だけで 心まで持たはしない  
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに  
むずかしくは知らない ただEAST ASIA  
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに  
むずかしくは知らない ただEAST ASIA

モンスーンに抱かれて 柳は揺れる  
その枝を編んだゆりかごで 悲しみ揺らそう  
どこにでもゆく柳絮に姿を変えて  
どんな大地でも きっと生きてゆくことができる  
でも心は揺りゆく 心はあの人のもの  
山より高い壁が築きあげられても  
柔らかな風は 笑って越えてゆく  
力だけで 心まで持たはしない

くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに  
むずかしくは知らない ただEAST ASIA  
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに  
むずかしくは知らない ただEAST ASIA

世界の場所を教える地図は  
誰でも 自分が真ん中だと 言い張る  
私のくにをどこかに乗せて 地球は  
くすくす笑いながら 回ってゆく  
くにの名はEAST ASIA 黒い瞳のくに  
むずかしくは知らない ただEAST ASIA

